

『本当』に豊かな油谷町に

向津具中学校三年 山中 淳嗣



ぼくは、南方に住んでいますが、いつも通う道は、ぼくが小学校低学年のころ、車が二台通れるか通れないかぐらいの幅でした。でも今では、トラックがすれ違っても通れるぐらいの広さになりました。

休日になると、観光バスがどんどん入ってきて、それからぞろぞろ人が降りてきて、その人の列は二尊院へと続きます。

少し前までは、訪れる人も少なく、桜の木が何本もあり、春にはきれいに咲いていたので、その桜を楽しみにしている人もいました。でも今では、その桜はなくなりましたが、そのかわりに、楊貴妃の像ができました。目につきやすいところには、大きな看板がたてられたりしています。「漂着の浜に口マン伝える墓」など新聞などに取り上げられるようになり、ずいぶんと、今までよりも有名になりました。町にも活気があふれています。

全国のいろいろな所の市町村は、自分たちの手で町を発展させていこうと、町のイメージづくりをしたり、地場産業や観光資源を利用して、地域の活性化を図ろうと、「一村一品運動」というのもやっていることを学びました。これは一つの村で特産品を考え、それを強力に売り出し、自分の町や村を活気づけようということです。

油谷町も「楊貴妃の里」を中心に観光化が進み、道路の拡張や整備がされるなど、ずいぶん豊かになりました。物質的に豊かになった反面、失うものも多いと思います。日本は水に恵まれてきました。でも今は、水を店で売られるようになり、今まで思いもよらなかったことがおきています。そのように考えていくと、次には、信じられないけれど、僕たちのまわりにある空気までもが、売られる時代になるのではないかと思えます。

今、わが故郷油谷町は、澄みきった空気と青い海があります。

時たま街などに出かけると、建物ばかりで自然があまりなく、なんだかおちつきません。けれど、向

津具は、どこを見ても自然そのもので静かで落ち着ける場所です。夜になれば虫の声も聞こえ、空を見れば、星がともきれいな見え、心がおちつきます。

本当の豊かさとはなんでしょう。この豊かな自然を残すためには、豊かな自然にめぐまれていても、それを豊かだと感じられる心がなくては意味がないと思います。向津具は自然にめぐまれていくけど、それを大切にするためには、人間が豊かと感じられる心がなくてはならないと思います。そのような心にするために、音楽を聞いたり、絵を見たりして、頭の中でいろいろと自分の世界をつくりあげたり、大自然を一步一步ふみしめてつきあってみれば、いつかは自然にとけこみ、自分と一体になるのではないかと思います。

僕たちの学校では、養寿苑に一年に何度か行く機会があります。始めは僕たちが、お年寄りの方を元気づけたり、なぐさめたりしようと思いい、そこへ行くのに、帰るときは反対に、元気づけられたりして、なんだかお年寄りの方のぬくもりが伝わってきて、豊かな心になります。

人々とふれあう機会を多くし、交流を深め手と手をとり合ったりし、お互いを分かりあえることのできる町になれば、今よりもっとあたたかく、住みやすい町になると思います。

いつまでも、僕が今、感じている温かい油谷町であるように、僕もいろいろな人とつきあい、たくさんのかんことを吸収していきたいと思えます。

